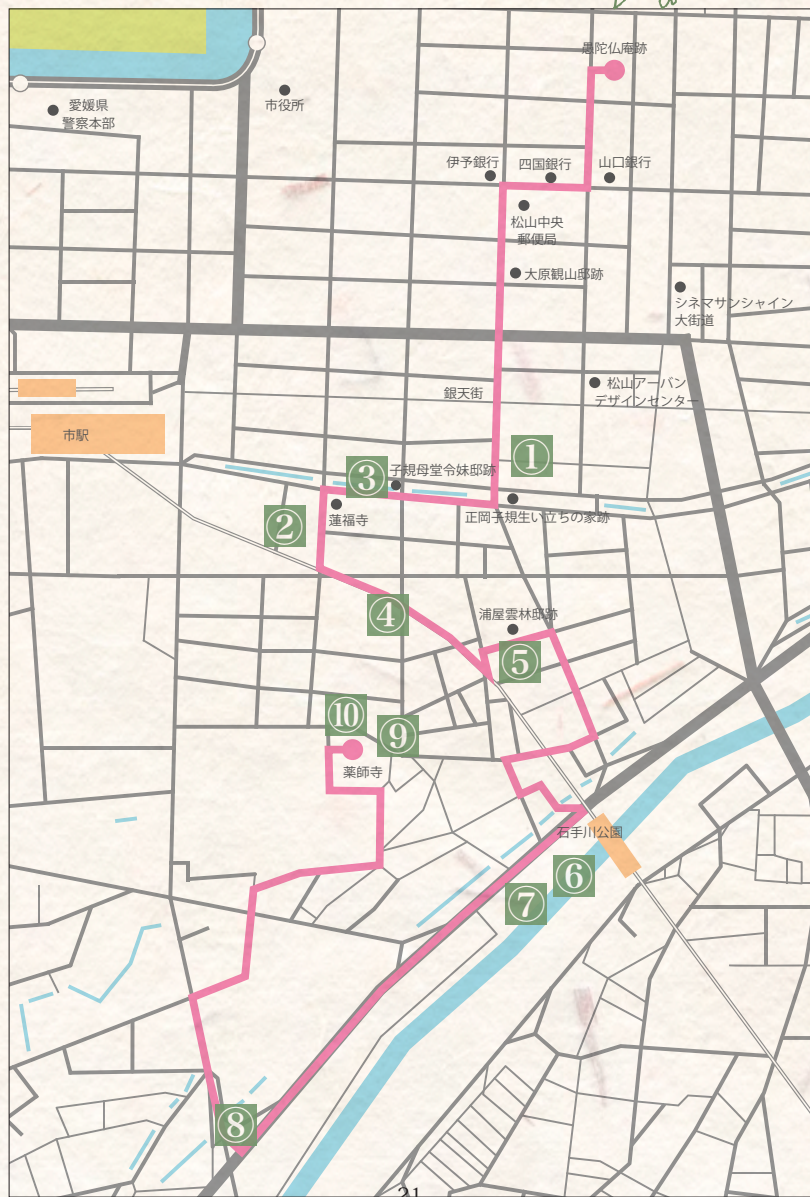


散策ガイド

中の川・石手川堤コース
(明治二十八年十月二日)



①

木槿咲く
ほりむかし

武家屋敷

③

真宗の
がらん
伽藍いかめし

稲の花

④

汽車道を
きしゃどう
ありけば近し
稲の花

②

朝顔や
あさがお
うらは
裏這ひまわる
はっけんや
八軒屋

⑤

花木槿
はなむくげ
うんりんせんせい
雲林先生
つつが
恙なきや

⑨

我見しより
われみ
久しきひよんの
きのみかな
木実哉

⑥

稲の花
こまつ
今津の海の
いまつ
光りけり

⑧

秋風や
あきかぜ
焼場のあとの
やきば
卵塔場
らんとうば

⑦

草むらや
くさむらや
土手ある限り
あて
曼珠沙華
まんじゆしゃげ

⑩

寺清水
てらしみず
すしか
西瓜も見えず
あきお
秋老いぬ



大原恒徳邸・武家屋敷エリア

おおはらつねのりてい

ぶけやしき



みどころ

子規の祖父大原観山邸跡や叔父大原恒徳邸の敷地内にあった子規の生い立ちの家跡など、子規のゆかりの場所をたずねよう。



▲ 昔の湊町の町並み

① 木槿咲く 堀や昔の

武家屋敷

大原家を訪れた子規が木槿を見て、自分の小さい頃を思い出した様子を表しています。

■ 大原恒徳

子規の母方の叔父。子規にとつて、恒徳は父親のような存在でした。

■ 木槿

初秋の季語で、朝に咲き夕方にしぼむことから、ほかないものの例えとして使われます。

子規の生い立ちの家の石碑を見ながら、昔のまちなみを想像してみよう。



▲ 木槿の花



▲ 叔父・大原恒徳 (右) 母・八重 (中央) 叔父・加藤拓川 (左)

② 朝顔や 裏這ひまわる

八軒屋

八軒屋の家々に朝顔が連なつて咲いている様子を表しています。

■ 八軒屋

八軒屋とは、当時蓮福寺の角を南に入り汽車道に出るまでの道の名前だったようです。

昔の中の川の写真と今のまちなみを比べてみよう。



▲ 昔の中の川
昭和40年の中頃の川です。子規が歩いてから約60年後の様子です。 (『創造都市まつやま』より)



みどころ



一面に稲の花が咲いていた様子を想像しながら
 汽車道を歩いてみよう。



▲昔の中の川周辺の地図
 1766年(延宝5年)の蓮福寺・中の川周辺の地図です。(蓮福寺保存)

③ 真宗の
 しんしゅう
 がらん
 伽藍いかめし
 稲の花

格調高い蓮福寺の周りを、花を咲かせた稲が囲んでいる様子を表しています。

■ 真宗の伽藍
 真宗の伽藍とは、蓮福寺のことです。「いかめし」という言葉から、蓮福寺が近寄りにくいくらい立派なお寺であったことがわかります。

みどころ③
 立派なお寺と稲の花が咲いていた景色を想像してみよう。



▲輝く稲穂 (イメージ写真)

④ 汽車道を
 きしやどう
 ありけば近し
 稲の花

近くに咲いている稲の花を見ながら、線路の横の道を歩いていた様子を表しています。

■ 汽車道
 汽車道とは、子規が散策する二年前(明治二十六年)に開通した伊予鉄道・横河原線です。今も当時と同じように、線路の両側に道があります。

みどころ④
 今と昔の汽車道の様子を見比べてみよう。



▶一八九三年(明治二十六年)に開通した伊予鉄道・横河原線です。
 (「松山観光ボランティアガイドの会」のホームページ 四国・松山まち歩き観光より)

浦屋雲林先生邸／石手川堤エリア

うらやうりんせんせいでい

いしてがわつつみ



みどころ

レンガづくりのトンネルをぬけ、石手川の土手にあがろう。



▲ 昔の石手川 (『創造都市まつやま』より)



▲ 昔の今出の海 (『散策集』より)

⑤

花木槿

はなむくげ

うりんせんせい
雲林先生

つつが
恙なきや

雲林先生の家の庭先に咲く木槿の花を見て、雲林先生が元気にしているか気になった様子がかがえます。

つつが
恙ない

「恙」とは、病気や災難を意味する言葉です。したがって「恙ない」とは、病気や災難などがなく、元気に日々をすごしていることを意味します。

■ 雲林先生 (一八四〇—一八九八)

雲林先生とは、子規の漢詩の先生であった浦屋雲林のことです。子規も友達とこの塾に通っていました。

庭には、広い池から清らかな小川が流れていました。後に松山を代表する料亭になるほど立派な庭であったそうです。

⑥

稲の花

いまづ

今津の海の

光りけり

石手川の土手にあがり、眼下に咲きほこる稲の穂が、太陽に照らされて、海のように輝いて見えた様子を表しています。

■ 今津の海

今津とは、今出(松山空港の南)のことです。当時の建物は二階建て以下の低い建物ばかりだったので、今出の方まで見えたのかもしれない。

みどころ⑤

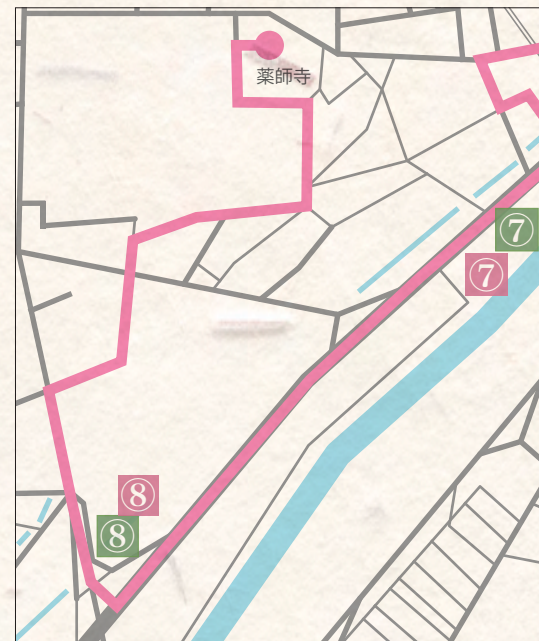
昔の雲林先生の家を想像して、今と比べてみよう。

みどころ⑥

海の方角を見てみよう。



▲ 今出の海で地引網をする様子 (『散策集』より) 1895年 (明治28年) に撮影されたものです。



みどころ

子規が散策している様子を
思い浮かべながら秋の石手川
を楽しもう。



▲ 昔の石手川
(愛媛文化双書刊行会発行 『子規と松山』より)

7

草むらや

土手ある限り

曼珠沙華

石手川の土手の草むらに、曼珠沙華が
咲き乱れていた様子を表しています。

曼珠沙華 (彼岸花)

ひがんばな

曼珠沙華とは、彼岸花のことです。
秋に真っ赤な花を咲かせます。
今回の散策の数日前から続い
ていた鼻血が治まったばかりの子規
は、この赤い花を見てわが身を案
じていたのかもしれない。



▲ 曼珠沙華 (彼岸花)

みどころ⑦

石手川の土手を歩いて
曼珠沙華を探してみよう。

8

秋風や

焼場のあとの
卵塔場

卵塔場

焼場から卵塔場に向かって、秋の風が
吹いていた様子を表しています。

焼場と卵塔場

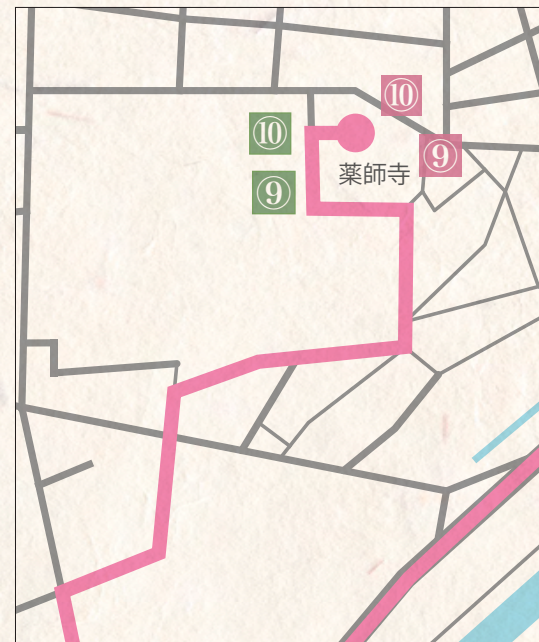
焼場とは、火葬場の
ことで、亡くなった人
をお墓に入れるために
焼く場所のことです。
また、卵塔場とは、
墓地のことです。

みどころ⑧

子規がどのよう
な気持ちで石手川
を見ていたのか想
像してみよう。



▲ 石手川土手にあった焼場
今は建物が建って当時の面影はありません。(「松
山観光ボランティアガイドの会」のホームページ 四
国・松山まち歩き観光より)



みどころ

子規も親しんだひよんの木を眺めてみよう！



▲ 昔の薬師寺山門

1970年（昭和45年）頃撮影されたものです。右側に移っているのは、刑務所の塀（へい）です。（愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）

⑨

我見しより

久しきひよんの

木実哉

少年時代によく見たひよんの木を久しぶりに見て、懐かしく思っている様子がかがえます。

■ ひよんの木

ひよんの木とは、薬師寺にあるイスノキのことです。子規は、少年時代にこのお寺でよく遊んでいました。また、この句を詠んだとき、子規はひよんの木の葉を木の実と勘違いをしていました。



▲ ひよんの木

みどころ⑨

ひよんの木の葉を観察してみよう。

⑩

寺清水

西瓜も見えず

秋老いぬ

お寺の冷たい泉に、西瓜が冷やされていないことを見て、秋のおわりを感じている様子がかがえます。

■ 寺清水

寺清水とは、当時、薬師寺にあった、冷たい泉のことです。この泉では、夏祭りのときに西瓜やそうめんが冷やされていました。今は、駐車場になっています。



▲ 薬師寺境内にあった泉

（愛媛文化双書刊行会発行『子規と松山』より）

みどころ⑩

薬師寺の境内を探検してみよう。